

シュンペーターの問題と方法

—方法序説—

塩野谷 祐一

目 次

- | | |
|--------------|-----------------------|
| 1 はしがき | (3) 静態・動態のアナロジー |
| 2 科学像における二元性 | (4) 総体としての社会的文化発展 |
| (1) 科学の定義 | 4 経済分析の方法 |
| (2) クーンとの比較 | (1) 4つの方法 |
| (3) 要約と展望 | (2) 方法論争 |
| 3 社会科学的認識の観点 | (3) 経済社会学とシュモラーのプログラム |
| (1) 文化社会学の断片 | |
| (2) 研究領域の設定 | 5 結語——経済と文明との緊張 |

1 は し が き

シュンペーターは「方法論は1つの体系の最初の章ではなく、最後の章でなくてはならない」と述べたことがある。⁽¹⁾ 方法論を具体的な問題から切り離して、一般的に議論することは不毛であるという意味である。しかし、シュンペーターの具体的な全業績が与えられている場合、その全体を理解し評価するために、彼の方法論を論ずることは可能でもあるし、また不可欠でもある。

彼は静態と動態、発展と循環、経済発展と歴史的発展、経済と文明、経済分析と経済思想といった大きな問題と取り組み、つねに対象の全体像を

描きながら、対象への根底的な接近を試み続けた人であった。そして、これらの問題についての彼の業績は、過去の学問の成果を寛容に継承しながらも、既成の学問の範囲と方法を大きく超えるものであった。彼の問題は全体的であると同時に多面的であり、彼の方法は総合的であると同時に独創的であった。このようなシュンペーターの全業績を適切に理解し評価するためには、まずそれらの鳥瞰図を与えるものとして、彼の方法論を明らかにすることが必要であると思われる。

シュンペーター自身、方法論を十分に意識した学者であった。彼の最も初期の論文の中には「理論経済学の数学的方法について」(1906年)があるし、最も晩年の論文の中には「景気循環分析への歴史的接近」(1949年)がある。彼の最初の大著『理論経済学の本質と主要内容』(1908年)はほとんど方法論の書物であるといってよいし、死後出版された彼の最大の著作『経済分析の歴史』(1954年)は、経済学説の内容よりも分析用具の方法的側面の発展に光を当てた経済学の総体的評価であった。

それにもかかわらず、彼の業績の方法的性格を確定することは簡単ではない。彼の方法論的叙述を集めてみても、ただちに彼の方法論とはならないし、それに彼は自分自身の理論について語ることが極度に少なかった⁽²⁾。端的にいえば、科学方法論の第一歩は科学の「範囲と方法」を論ずることである。彼の場合には、対象や問題の範囲はけっして固定していなかった。それは経済の静態から動態へ、発展から循環へ、経済発展から歴史的発展および体制的変革へとたえず拡大していった。こういう場合、科学の方法は、別個の問題について別々に考えられるものであろうか。それとも一貫した方法が要請されるものであろうか。あるいは別々の方法を組織化する原理が必要であらうか。これらの疑問は、彼が対象とした問題の焦点をどこに見出すかという疑問と結びついている。さらに、彼の初期の方法論的見解が、生涯の思索を通じて、なんの進歩もなく不変にとどまっていたと

考えることは危険である。事実、彼が見解を変えたと考えられる場合もあったし、もともと彼は通説的な立場に反対することが好きであったために、逆の立場を故意に強調する場合もあった。⁽³⁾

また、彼が方法論にたえず関心をもっていたといっても、彼の議論の仕方は専門的な方法論の観点から見ればかなり素人的であって、科学哲学の基本的な諸問題にまでは及んでいない。彼の方法的議論はあくまでも具体的な問題にそくして行われたのであって、彼自身、自分の方法論の議論の仕方は認識論的ではないとたえず断っている。そのため、彼が認識論上の問題についてどう考えていたのか直接的には判然としない場合もあり、彼が十分に体系的な科学方法論をもっていたとはいえないかもしれない。

しかし、シュンペーターの広範囲にわたる業績について、従来、部分部分が理解され評価されることはあっても、全体としての観点からの適切な評価が欠けており、したがって個々の業績についても必ずしも正当な評価がえられていないのは、彼の方法論を検討する試みがほとんどなされなかったことと関係があるように見える。既成のパラダイムの中で仕事をしている学者については、いちいちその人の方法論を論ずる必要はない。しかし、シュンペーターのような人については、方法論的観点からの吟味によって、シュンペーターの世界の鳥瞰図を描くことがなによりも不可欠である。彼の方法論を吟味するということは、結局のところ、彼の全体としての業績を貫ぬく隠れた観点、意識、精神、性向といったものの脈絡を発見することによって、彼の世界を解釈し再構成することである。

このように考えてくると、シュンペーターの世界の鳥瞰図を与えるものとして彼の方法論を吟味することは、われわれの側にいくつかの基本的な課題を提起するのである。第1に、シュンペーターの方法論を吟味するという仕事は、狭義の経済学の問題のみならず、それを超えた広範な諸問題についての彼の理論構造をわれわれ自身が再構成するという仕事を含まざ

るをえない。また第2に、彼の方法論を理解し評価するためには、それを現代の科学哲学のパースペクティブの中に据えてみるのが有益である。彼自身は専門的な科学哲学者ではなかったけれども、彼の仕事はそのような専門的検討に値する内容をもっており、その検討を通じて彼の方法論を明確化することが期待できる。第3に、現代の経済学者の中には、シュンペーターほど幅の広い体系を模索した人はいない。上述の観点から彼の方法論を吟味することは、現代の経済学者の視野を反省する上で一つの得難い参照の枠を与えるであろう。

このような意味で、シュンペーターの方法論を論ずることは、シュンペーター研究のための包括的な問題設定を行うことに等しい。以下では方法論という視点から、彼の取り上げた問題と方法とそれらの根底にある精神が展望されるが、それらを具体的内容にそくして論ずることは別の機会の課題であって、本論文はそのための方法序説である。

2 科学像における二元性

(1) 科学の定義

シュンペーターは晩年に書いた『経済分析の歴史』の第1編序論を「範囲と方法」と題し、対象とする経済学について方法論的な議論を展開している。この部分⁽⁴⁾は一部未完成ではあるが、2つの点において注目すべき素材である。1つは、その議論が、彼が生涯を通じて述べてきた方法論的見解について、成熟し均衡のとれた総括を表わしていること、いま1つは、その議論が、実際に彼がギリシャから現代までの龐大な経済学の体系を取り上げるさいの方法的フレームワークとして提起されていることである。われわれは、彼が経済学史のために書いたこの「範囲と方法」を、彼自身の業績に関する「範囲と方法」のための適切な資料として検討することができる。

われわれはまず出発点において、科学とはなにかについてのシュンペーターの特徴的な考え方を明らかにし、問題点を浮かび上げることにした。

シュンペーターは経済学の歴史を扱うに当たって、まず経済学は科学であるかと問い、それに答えるために、科学とはなにかを論じている。もちろん、その定義に照らして経済学は科学であるとみなされている。

彼はさまざまな視角から、相互に関連したいくつかの定義を与えている。⁽⁵⁾
(1)「科学とは、それを改善しようとする意識的な努力の対象となっているような種類の一切の知識をいう。」ここで科学について「改善しようとする意識的な努力」ということを語るためには、科学の改善や進歩の基準が何であり、科学的努力がどのようなルールに従うかが明らかにならなければならない。

彼はこの点については、単に経験科学の立場を前提とするということでは十分であると考えているように見える。彼は経験科学における手続のルールについて2つの顕著な性質を挙げている。すなわち、このルールは、第1に、「われわれが科学的根拠に基づいて受け入れざるをえない事実を、『観察や実験によって検証することのできる事実』という狭いカテゴリーに制限するものであり」(傍点シュンペーター)、第2に、「承認される方法の範囲を、『検証することのできる事実からの論理的推論』に制限するものである。⁽⁶⁾」この叙述は、科学的努力は経験的素材に論理的分析を適用することであると述べ、大ざっぱな論理実証主義の立場を予想させるのみであって、理論の評価に当たって検証が問題とされているのか、あるいは反証が問題とされているのかもただちには定かではない。

シュンペーターが(1)の定義において「改善の努力」という言葉を使っているのは、特定の方法的基準をもった努力を指すためではなく、むしろ別のところに意図があった。シュンペーターは、「改善の努力」が方

法や技術といった特定の思考慣習を育成し、科学はこのような方法や技術をもつ点で日常的常識を超えていることを強調しているのである。

そこで、この点をいっそう明示的に強調すれば、次の定義が与えられる。(2)「科学とは、事実発見、解釈、推論（分析）のための特殊化された技術を発展させてきた一切の知識分野をいう。」この定義は科学について上述の「改善の努力」が行われるように、科学が一定の方法や技術をもつものであるということを明らかにしているが、同時にそれらの仕事が特殊な専門家の仕事であることを暗に含んでいる。

したがって、科学を仕事とする専門家集団に照らして社会学的な定義を与えるなら、次のようになる。(3)「科学とは、いわゆる研究者とか科学者とか学者という人々が、現在までに蓄積された事実や方法を改善する仕事に従事しており、またそうすることによって、彼らが『素人』や結局において単なる『実務家』とも異なった形の実事や方法の把握に通じているような一切の知識分野をいう。」このような定義は科学の社会学的考察、あるいはかつて知識社会学と呼ばれた領域と結びつく。

シュンペーターが科学の社会学的側面について意味していることは次のようなことである。すなわち、科学の社会学は「社会的要因や社会的過程が特殊に科学的なタイプの活動を生み出したり、その発展の速度を条件づけたり、同じように可能な論題が他にありながら、ある種の論題を取り上げるように科学の方向を決定したり、ある種の手続的方法を他のものよりも奨励したり、ある研究方向や個人的業績の成否を説明する社会的機構を設定したり、(われわれの意味での)科学者の地位や影響力や研究を促進したり抑圧したりするなどの状態を分析するのである。」⁽⁷⁾

シュンペーターは科学の方法的側面を扱うさい、科学哲学(Wissenschaftslehre)と科学社会学(Wissenschaftssoziologie)の2つの分野を挙げていることが特徴的である。いうまでもなく、前者は科学的理論の身分や構造や

機能を論ずるが、ともすれば理想的な理論のあり方に偏りをもつ傾向がある。科学社会学は現実の科学の営みに注目し、科学の成長・発展・受容・破棄といった動態的な現象、しかも多様な形態をともなった動態を明らかにしようとする。シュンペーターが科学の社会学的側面に注目するのは、科学の外面的な事情が積極的にせよ消極的にせよ、科学の内面的な発展に支配的な影響を及ぼすとみているからである。そのような影響をもつ要因として、イデオロギーと学派を指摘することができよう。

イデオロギーの介入は、理論や仮説を形成するさいの着想の段階において、問題や方法の選択が社会に関する先入観によって規定されるという事情を指している。学派は実際に学問が行われるさいの科学者集団の行動の特徴をいう。シュンペーターにおいては、イデオロギーも学派も科学にとって事実上不可欠な外面的な要因であるが、科学の内面的発展にとっては切り捨てられるべきものとみなされる。ここには科学哲学と科学社会学との間の興味深い関係が存在する。イデオロギーについては別の機会に述べたので、⁽⁸⁾ここでは学派についてのシュンペーターの見解を取り上げよう。

彼は経済学には学派は存在しないと、学派を形成すべきではない、と主張したとしばしば考えられている。しかしこれは必ずしも正確ではない。彼は科学上の学派が特定の学者や大学を中心にして形成され、類似の問題や方法をもち、緊密な連帯感をもって活動する状態を当然のこととして肯定している。そしてこれこそが科学の社会学、すなわち社会現象としての科学の研究における重要な興味深い現象であることを認めている。彼が学派の問題をかなり詳しく論じているのは、彼が 1931 年神戸商大において行った「世界観・学派・方法」に関する講演においてである。「そのような学派がいかにして興隆し衰退するか、それらがいかにしてまたなぜ相互に論争を行うか、それらの成功と敗北がいかにして科学的努力の方向を決定するか、——これらすべてのことは、われわれが現在もっているような

種類の科学をもっている理由や、それ自体としては有望なものでありながら、別の思考の方向がとられなかった理由をかなりの程度説明するものである。この意味での学派はおそらくつねに存在するものである。なぜなら、それはリーダーシップという基本的な社会的現象と密接に結びついて⁽⁹⁾いるからである。」のちに見るように、ここで彼がリーダーシップ(指導力)ということを語るとき、経済発展における革新の担い手との類比を念頭においていたことはたしかである。

彼が考察の対象として認めている学派間の論争は、基本的な接近方法、重視する問題の分野、使用する概念や定理などの違いをめぐって生ずるが、シュンペーターによれば、それにもかかわらず、諸学派は科学の基本に関しては共通の地盤に立っているとみなされる。それに対して、シュンペーターが科学の領域において認めない学派がある。それはこのような科学の根本的性格を否定し、科学外の観点、すなわち哲学のおよび政治的観点から主張する学派である。

「私は時々、経済学には学派は存在しないと書いたとみなされている。私が言う意味は、真面目な経済学者の間では基本的な観点に関する相違は現在では存在しない、ということである。」⁽¹⁰⁾彼自身が近代経済学に関して認めたマーシャル学派とかローザンヌ学派とかウィーン学派といったものは、科学上の些細な相違にかかわるものであって、社会学的には重要ではあるが、科学としての経済学の基本的な立場にかかわるものではなく、大きな問題とはみなされないのである。他方、政治的な観点や世界観をめぐる学派の対立も事実上学問的な対立と区別できないような形で存在するが、シュンペーターはその現象は科学の領域に属するものではないとみなし、それを断固排撃するのである。

彼は経済学を、誰もが認めざるをえない客観的な用具にまで高めたいという熱烈な信念をもっていた。「経済学は1つ」⁽¹¹⁾(one science of economics)

というのが彼の信条であった。彼は生涯、しばしば方法論に口をはさんだけれども、その大きな動機は、経済学の共通の地盤を危くし、経済学の内部抗争を招くような学界の空気を憂慮したためであった。本当のところは、彼は方法論よりも、分析用具を洗練させ、現実問題を解明するという科学本来の仕事の方を好んだのである。

シュンペーターは以上の定義のほかに、さらに、(4)「科学とは洗練された常識である」とか、「科学とは道具化された知識である」という速記法的な定義を与えている。⁽¹²⁾(4)については、「常識」ということよりも「洗練された」というところに重点があり、その洗練の仕方は、常識を「一般の間では使われない技術」すなわち「道具化された知識」に変形するということである。しかし、(4)や(5)のような短い定義はそれだけでは科学の構造的なしくみを伝えるには不適切であって、それらは上述の(2)の定義、すなわち科学は専門化された技術をもつ分野であるという定義に包摂されるものとみてよいであろう。

(2) クーンとの比較

このようにして、科学の定義として(1)(2)(3)の説明が与えられたことになる。それらは相互に関連し合った科学の側面であり、相互に矛盾するものではないが、シュンペーターが最も重視するのは(2)の側面、すなわち専門的技術ないし方法の一群という側面である。この側面をクーンのパラダイムという概念によって呼ぶこと自体は誤りではない。クーンによれば、科学はパラダイムによって支配され、パラダイムを獲得することによって科学となる。パラダイムは科学者集団の成員によって共通に持たれる理論的仮定、法則、モデル、技術などをいう。クーンはパラダイムをいっそう正確に定義するに当たっては、記号的一般化、モデル、価値基準、⁽¹³⁾問題の見本例という4つの要素を含むものとみなしている。シュンペーター

一はまさに科学がこのような1組の道具であると考えるのである。

しかし、クーンのパラダイム概念は科学者集団の社会学的、心理学的側面を強調することと結びついており、彼らの必ずしも合理的とはいえない特徴的な活動が、科学そのものの性質、構造、変化を規定するとみるのである。シュンペーターの見解はこれとはまったく異なっている。上述のように、彼は科学がイデオロギーや学派といった社会的要因と関係をもつ限りにおいて、研究者の社会的存在に注目し、(3)に見られるような社会学的定義を提出するが、その他の点においては、研究者の動機とか信念とか説得といった要因は科学の内面的なあり方には介入してこないとみる。むしろ科学の社会学的側面の存在を一応認めた上で、次にそれを最大限に排除し、純粋に技術的側面に限定しようとするところに、シュンペーターの科学観の基本の1つが見出される。

科学を科学者集団にかかわらしめたシュンペーターの定義(3)は、学派の問題を提起したが、上でみたように、彼はいわば非科学的集団としての学派を科学の中で取り上げることを拒否する。クーンはパラダイムを獲得することが科学たることの基準であるとみなしたが、シュンペーターはそのことの裏面として、人々が哲学および理想から脱却したときに初めて、科学が成立するとみる。哲学は形而上学であり、理想は価値判断であるが、科学は事実認識である。クーンのいう通常科学が成立する以前にはパラダイムは形成されていないが、シュンペーターによれば、哲学と科学と理想とが混合した状態がそれに相当する。事実認識を目的とする科学活動が哲学や実践から切り離されると、科学は「道具化された知識」を獲得するのである。しかし、この分離は社会科学においてはそのように簡単には行われぬ。科学的活動に先立って、世界観や理念やヴィジョンといったものが問題の設定を可能にするのであって、これがシュンペーターにとって科学とイデオロギーとの関係の問題として残るのである。

このような大きな留保条件づきではあるが、シュンペーターは科学の分析装置としての側面を重視する。このことに対応して、彼の(1)の定義にあるように、科学は進歩し改善されるという見方がただちに導かれるように見える。クーンにおいて科学が進歩するとみられるのは、1つのパラダイムの枠の中での活動についてのみである。与えられたパラダイムのもとで、いわゆる通常科学は事実の蒐集・測定、事実と理論との調和、理論の整備という3つの仕事に専念する。⁽¹⁴⁾この場合には科学は目標をもち、それに照らして仕事の有効性や効率性を語るができる。これがはっきりとした科学の進歩の基準である。しかし、パラダイムの変革を通ずる科学の発展についてはどうであろうか。異なったパラダイムは相互に非通約的であり、パラダイムの変革は証明や反証の問題ではなく、極端にいえば説得や改宗の問題であるというのがクーンの見解である。彼はそのような科学の発展を単に進化とのみ呼んでいる。

シュンペーターの考えはどうか。彼はクーンが批判の対象としたような単純に累積的な科学発展の見方をとってはいない。「科学的分析は単純に、なんらかの素朴な観念から出発して、一直線にストックを増大させるというような論理的に一貫した過程ではない。それは単純に、客観的な現実を次々と発見していくものではない。」⁽¹⁵⁾「科学は全体としてこれまで論理的に一貫した構造を打ち立てたことはなかった。それは熱帯の密林のようなものであって、青写真に従って建てられた建物ではなかった。」⁽¹⁶⁾

シュンペーターにとって、学問の発展は、いわば歴史の中での対話を通じてジグザグに行われる。過去の業績の一切が現在の科学の中にもれなく整理され、包含されているわけではない。これが実はシュンペーターにとって、科学の歴史的研究を必要とする1つの理由であった。それではどういう形で科学の発展が行われるのか。次の文章は再びシュンペーターの革新の概念を躍如として示している。「科学的分析は、もし『進歩』があると

すれば、ジグザグの形で行われるのであって、論理が指示するように行われるのではなく、新しい観念、新しい観察、新しい必要の衝撃、さらには新しい人間の傾向や気質といったものが指示するように行われるのである。⁽¹⁷⁾ シュンペーターの経済発展の理論は、企業者の行う革新が経済の慣行的軌道を変革することを強調するものであるが、その革新とは、新しい財、新しい生産方法、新しい販路、新しい供給源、新しい組織を導入することであった。これと類比的に、科学における発展も革新によって旧科学の破壊を通じて断続的に行われる。ここに彼の科学観のもう1つの重要な要素が見出される。クーンは科学革命を政治革命になぞらえたが、支配的秩序の破壊、および科学におけるパラダイムの非連続性の強調という点ではシュンペーターと類似している。

(3) 要約と展望

ここで一応の要約を試み、われわれの問題点の展望を示すことにしよう。シュンペーターの科学像を特徴づけているものは、一見したところ二元性をもった観念である。一方において、彼は科学を分析装置の体系と考え、科学的知識の蓄積と改善が一定のルールに従って進められていく合理的活動とみる。しかし、他方において、科学は革新的な構想の衝撃を通じて、また社会現象としての科学者集団の手によって展開されていく、とみなされる。前者は伝統的な科学観であり、後者はその批判である。その批判という点において、シュンペーターはクーンと類似した考え方をもっている。

しかし、シュンペーターは科学活動を規定する社会学的、心理学的要因を認めるけれども、それによって科学の合理主義モデルを否定するところまでは進まない。クーンはこれらの要因の作用を説明するためにパラダイムの概念を用い、パラダイム間の非通約性、パラダイム選択における確信

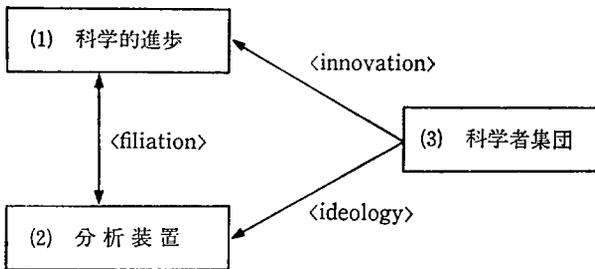
の要素、パラダイム間の断絶を強調した。シュンペーターはそのような非合理主義的モデルとは違って、いわばパラダイムを通ずる究極的な連続性を想定していたように思われる。

シュンペーターが一方において科学の技術的側面と他方において科学の社会学的側面とを重視しながら、なおパラダイムを通ずる連続性を強調したのは彼の特徴的な見方であって、それを解く鍵は「科学的観念の系統的派生」⁽¹⁸⁾ (Filiation of Scientific Ideas) という概念であると考えられる。彼が科学の2つの側面を位置づけるに当って、極端な合理主義モデルにも非合理主義モデルにも偏向していないのは、「系統的派生」という概念が2つの側面を巧みに統合しているからであるというのが、われわれの提起する論点である。「科学的観念の系統的派生」の過程とは、「経済現象を理解しようとする人間の努力が、無限の連続の中で分析装置をつくり出し、改善し、破壊していく過程」⁽¹⁹⁾ を意味する。

以上では、ターンの議論との類似点と相違点を指摘するために、彼のパラダイムの概念を用いたが、シュンペーターの方法論を追求していく上で、パラダイムの概念が不可欠であるとは思われない。むしろシュンペーターのフィリエーションの概念がそれにとって代わる位置にあると考えられる。

シュンペーターの科学のイメージを次の図のように構成してみよう。

(1) (2) (3) は彼が定義として与えた科学の諸側面である。彼が直接に対象とする科学的成果は (1) と (2) によって特徴づけられている。合理主義的な科学観によれば、科学は既定の手続的ルールに従って事実を蒐集し、理論を改善し、理論と事実とを調和させ、累積的に日進月歩していき、誤った理論はただちに放棄されていく。科学者は真理を追求する公平無私な態度でこの純粋に科学的な活動に従事する。このような素朴な科学像をとるのでない限り、(1) と (2) とはただちには両立せず、両者の間には科



学哲学的な断層がある。われわれはそれをシュンペーターの科学像における二元性と呼んだ。

彼は(3)の定義によって、科学の社会学的側面を導入するが、それはこの二元性にかかわりをもつ限りの最少限の言及である。その意味で、シュンペーターの科学のイメージにおいては、(3)の要素は(1)と(2)に比べて副次的な位置にあるが、科学の現実的条件を与えるものとして不可欠な存在である。しかし、彼にとって、この社会学的要素は科学世界の秩序に対する攪乱要因である。(3)は(2)の科学の分析装置に対してイデオロギーの問題を提起し、(1)の科学の進歩に対してイノベーション(革新)の問題を提起する。いずれも客観的な科学およびその連続的進歩という観念に対して、不調和音を与え、破壊的作用を及ぼす。

それにもかかわらず、科学の世界が内在的独立性を維持しつつ発展するとみることができるのは、(1)と(2)とのギャップを埋めるように、科学史の過程をフィリエーションの観念によって把握しようという彼の想定のためである。それは科学という1つの世界を秩序あるものとしてとらえるための作業仮説のたぐいである。

シュンペーターの科学のイメージについて、このような一応の構図がえられたとすると、いっそう掘り下げていかなければならないいくつかの重

要な問題点が浮かび上がってくる。第1に、経済学における分析装置の様相、第2に、科学とイデオロギーの問題、第3に、科学史における革新、進歩、およびフィリエーションの問題がそれである。第2および第3の問題は別の機会にゆずり、以下では第1の問題、すなわちシュンペーターが構想する最も広義の経済学の分析装置について、問題と方法の2つの側面を解明することにしたい。

3 社会科学の認識の観点

(1) 文化社会学の断片

シュンペーターは『経済発展の理論』(第1版, 1912年)の最終章に当たる第7章「国民経済の全体像」⁽²⁰⁾において、経済学的議論の総括を図ると同時に、経済の静態および動態の現象をもっと広範な社会生活の領域の中に据え、より一般的なレベルで統一的な説明を試みている。ここには経済のみならず、政治、芸術、科学、社会、道徳など、社会科学の対象となる領域が含まれており、ここでのシュンペーターの議論はいわば社会科学の認識のための注目すべき観点を示している。結果的にみれば、経済の静態・動態の関係が他の領域にも類比的に適用されるのであるが、実はそのような経済についての見方は、より一般的な見方の1つの適用にほかならないのである。このようにして、上述の科学の領域においても静態と動態の現象が識別されることになる。

ところが不幸なことに、シュンペーターは『経済発展の理論』の第2版以降、この興味深い章を全面的に削除した。彼は第2版の序文の中でその理由を述べているが、⁽²¹⁾彼はその章を「文化社会学の断片」と呼び、人々の関心があまりにもその章に集まったために、彼が意図した経済理論の拡充から人々の注意をそらせることになったという。彼自身が認めているように、「無味乾燥な経済理論の問題」よりも第7章の「文化社会学の断片」

の方がはるかに面白いものであった。

しかし、この「文化社会学の断片」は彼の経済発展理論の着想をより根源的に説明するものであると同時に、経済学を超えた領域における彼の貢献を理解する上で重要な鍵になると思われる。これが人々の眼から隔離されたのは不幸なことであった。われわれはこの断片を掘り起こし、シュンペーターの科学方法論を構成する重要な要素とみなしたいと思う。その見方を彼の「社会科学的認識の観点」と呼ぶことにする。以下では4つの段階に従ってその議論を展開しよう。

(2) 研究領域の設定

まず第1に、本来社会現象は混然とした一体であるが、この中から個々の専門的な研究領域をどのように設定することができるか、という問題がある。たとえば、経済学という研究領域は、経済という対象をどのようにして現実の中から抽象するのであろうか。

「社会事象は1つの統一的現象である。その大きな流れから経済的事実をむりやりにとり出すのは、研究者の秩序を立てる腕である。」⁽²²⁾ シュンペーターは『経済発展の理論』の第1章をこのような言葉で始めている。もともと社会の中に経済という独立した領域が存在しているわけではなく、抽象の作為によってそのような領域がいわば暴力的に取り出されるのである。その取り出し方をシュンペーターは「秩序を立てる腕」(die ordnende Hand)と呼んでいる。つまり、取り出した対象が秩序を形成するように取り出すというのである。これは一見したところなんでもないことのように見えるが、きわめて重要な基礎的観念である。社会に関する任意の研究領域は秩序をもったものとして描かれなければならない。対象が秩序をもったものとみなされるということは、科学が思惟を通じて対象を秩序化する機能を果たすということである。

先にわれわれは科学とはなにかについてのシュンペーターの議論を取り上げたが、そこで大まかに指摘されたのは科学の分析装置としての側面と、科学の社会学的側面とであった。これらは単に科学の外面的な叙述であって、科学がどのような機能をもつかとか、あるいはどのように対象領域を設定することによって科学自身が成立するか、といった内面的な規定には立ち入っていなかった。この新しい問題に対して、シュンペーターは科学は秩序化の機能を持ち、特定の科学の領域は秩序をもつとみなされることによって成立する、と答えているのである。

もちろん秩序とはなにかが明らかにされないかぎり、問題は完全には答えられていない。しかし秩序の内容が具体的にどのようなものであるかは、個々の科学によって異なるし、また1つの科学の中でも、秩序の内容を違った仕方では規定することが学派間の論争や科学革命を引き起こすのである。したがって、科学が描く特定の秩序は、基本的には、科学の分析装置に含まれる理論モデルの性格によって表現されるのである。

さて、シュンペーターは社会生活の領域全般に通用する観点として、「われわれが区別する諸領域に対しては、現実にもまた一般的にも、相互に異なった人間集団が対応している⁽²³⁾」と主張する。ある社会生活の領域を1つの科学の対象として取り出したいのであれば、その領域に固有な人間類型を見出し、その領域の活動や状態がそのような類型の人間集団の行為によって自律的に説明されるのでなければならない、というのである。

このような社会科学の規定の仕方が、18—19世紀に確立されたモラル・サイエンスの考え方に従っていることは明らかである。物質の世界を扱う自然科学と違って、モラル・サイエンス（道徳科学）は精神や意識をもった人間の思考、感情、行動を対象とし、そのような人間集団の活動を取り扱うのである。

経済という領域には「経済人」の概念によって知られる特定の人間類型

が対応し、彼らの行為すなわち経済行為が経済の領域を限定する。このような人間類型やその行為が単なる抽象や想像の産物ではなく、労働者、企業者、商人、農民などの具体的な人間集団として見出されることが、経済という領域を区別することの1つの正当化の理由となる。芸術家、政治家、科学者といった人間集団の存在は、同じように別々の領域を画する一応の理由を与える。もう1つのいっそう重要な理由は、識別された人間の行動様式が区別をするに足るほどの独立性と自律性をもつことである。「1人の商人の帳場における行動と、同一商人の芸術学徒としての行動とが、困難なしに概念的に区別されることは明らかである。」⁽²⁴⁾

シュンペーターはわれわれが「社会科学的認識の観点」と名づけた問題全体を、経済の領域と他の社会生活の領域との類比（アナロジー）という言葉で呼んでいる。これは、経済学が「経済人」という人間類型および経済行為の定式化を最も厳密に行うことに成功しており、他の社会科学の領域については、そのような定式化が類推的に議論されるにとどまるからである。

この問題との関連で、シュンペーターがのちに『資本主義・社会主義・民主主義』において伝統的な民主主義政治理論を180度転回させたことを指摘することができる。⁽²⁵⁾ 民主主義は1つの政治機構であるが、伝統的理論はこれを公共の利益に関する人民の意思を実現するものとみなしていた。シュンペーターによれば、それは規範的理念の叙述にすぎず、民主主義下の政治領域における現実を描写するものではない。彼は、民主主義政治は議員や大臣になりたい政治家の私欲に駆られた票集めの行動にほかならないと見てのけた。彼は政治哲学とは別に、政治の領域における現実の人間類型を見出そうとしたのである。

（3） 静態・動態のアナロジー

次に第2の段階として、人間類型による研究領域の識別に続いて、これ

らの領域を秩序をもった状態として描写することが必要である。シュンペーターは、任意の社会生活の領域において、ある一義的な状態が成立しているのは、その領域を規定している一組の与件の結果であるとみなす。ここでも経済と他の領域との間にアナロジーが語られる。経済に関しては、与件としての資源の量、技術、嗜好、社会組織などが一定であると想定すると、人間類型としての「経済人」の行動様式は、利己心の発動と競争のメカニズムを通じて一定の資源配分の状態をもたらすのである。これが経済静態の観察方法である。これと同じ見方が他の領域にも適用されるのである。彼は「この認識こそは、人間の事象の科学的把握にとって暁の光を意味するものであった⁽²⁶⁾」とさえ述べている。シュンペーターは『理論経済学の本質と主要内容』において経済学の総括を図ったが、それはまさにこの経済静態の問題領域についてであった。

別の説明の仕方をすれば、この静態の確立という方法は、特定の領域に属する未知なるものを、その領域の外にある既知なるものに究極的に還元するということである。経済を例にとれば、「2つの現象の間に一定の因果関係を見出すことに成功した物合、この因果関係において『原因』の役割を演ずる現象がもはや経済現象でない場合には、われわれの任務は果されたのである。すなわち、われわれは問題の場合についてわれわれが経済学者としてなしうることをなし終えたのであって、その残りはこれを他の学問にゆずらなければならない。これに反して、この『原因』自体がさらに経済的性質のものであるならば、われわれはさらに非経済的原因に到達するまで説明の努力を続けなければならない⁽²⁷⁾。」

静態の認識方法は、特定の領域に属する諸要因を外部的な与件によって説明するという意味では、一見したところ独立性がないように考えられるかもしれない。しかしそうではない。与件が与えられた場合に、特定領域の内生変数がどういう姿をとるかを因果的に説明することが重要であって、

その領域が内生変数の作用様式を説明する固有の原理をもつところに、その領域の自律性と独立性が見出されるのである。

したがって、総括的にいえば、「われわれの問題はつねに経済的事実を非経済的与件に結びつける因果関係の一般的形式を叙述することである⁽²⁸⁾」と述べることができる。このシュンペーターの叙述の中で、「因果関係の一般的形式」という語は狭義の経済理論の基本的課題を表わしていることに注意すべきである。のちに述べるように、シュンペーターの考える経済分析の用具は狭義の経済理論にとどまらず、彼はとくに歴史的方法を重視している。経済的事象および非経済的与件は、現実にはともに歴史的経験であって、歴史的研究の次元では、問題は「因果関係の個別的形式」を把握することであるといえよう。彼は『経済分析の歴史』の中で、われわれが今問題としている点について、次のようなポイントをついた言葉を述べている。「歴史的記録は本来、純粋に経済的なものではありえず、純粋経済的でないような『制度的』事実をも不可避免的に反映せざるをえない。したがって、歴史的記録は、経済的事実と非経済的事実とが相互にどのように関連しているか、また異なった諸社会科学が相互にどのように関連すべきかを理解するための最善の方法を提供している⁽²⁹⁾」(傍点シュンペーター)。

しかし、経済分析の諸方法については、のちに取り上げることにしよう。

第3の段階は静態を超える動態ないし発展の識別である。どの領域においても、その領域の内部から、与件を変更し、これまでの与件に適合していたその領域の活動の枠組みを破壊する力が働く。これが発展の現象である。1つの領域が科学的研究の対象として独自性をもつとみなすことができるのは、先に見たように、その領域に固有の人間類型が存在し、その領域の諸要因が外生的与件のもとで、独自のメカニズムを通じて1つの均衡状態に収束するというだけでは十分ではない。その領域自身がみずからの内部から革新を生み、旧来の秩序を破壊するというメカニズムをもつこと

が、その領域の独自性を保証するもう1つの側面である。

シュンペーターの『経済発展の理論』は、新しい財貨、新しい生産方法、新しい販路、新しい供給源、新しい組織の導入という形を通じて経済発展が生み出される姿を描いたものであって、その中心概念は革新の担い手としての企業者である。そしてこの発展のメカニズムのアナロジーが再び経済以外の他の領域について試みられるのである。もちろん、社会生活の各領域は、革新が実現し貫徹するための独自のメカニズムをもつであろう。しかし、基本的特徴は同一である。それは、指導者という人間類型がさまざまな領域において旧秩序を破壊し、新しいことを遂行するというイメージである。企業者は経済領域における指導者の特殊ケースである。指導者の人間類型は、静態的、適応的、慣行的行動をとるにすぎない平均的な多数派の人間類型と対比される。経済だけでなく、芸術、科学、政治などにおいても、このような人間類型の相違が存在するというのが、シュンペーターの想定である。「いたるところで、この2つの類型は明確な線によって分けられている。この線は新しい芸術傾向、新しい『学派』、新しい政党を創造する人物を、さまざまな芸術傾向、⁽³⁰⁾『学派』、政党によって創造される人物から区別している。」

発展現象における人間的要素の強調はもはや不思議ではない。これまでの議論から明らかなように、第1に、1つの研究領域を識別するに当って固有の人間類型を見出すこと、第2に、その領域における静態現象を与件の帰結としてとらえるに当って、多数派の人間にみられる正常な人間類型の行動によってメカニズムを構成すること、第3に、発展現象を与件の破壊としてとらえるために、少数派の人間にのみみられる非凡な人間類型の行動を重視すること、——これらは一貫した推論の段階である。

(4) 総体としての社会的文化発展

シュンペーターは以上の3つの段階にわたって、社会生活の各領域を認

識するための統一的な観点を適用してきた。こうして各領域はそれぞれの人間類型をもち、それぞれの与件に適応する静態のメカニズムと、それぞれの与件を内部から変更する発展のメカニズムとをもつことになる。このように理解された諸領域を全体として眺めるのが最後の第4の段階である。

これらの領域の間には、社会科学の学際的ともいべき複雑な関係が存在するはずである。1つの領域の内生変数の状態は、他の領域に対しては与件を形成するということであろう。そして逆に、前者の領域の内生変数の状態は、後者の領域の内生変数の状態と与件として決定されたものであるということもあろう。さらに1つの領域だけを部分的に取ってみれば、その内部からみずからの与件を変革する力が働くともみることができけれども、その領域を全体としての諸領域の中に意識的にみてみると、革新の力が他の領域の状況に応じて強まったり弱まったりすることが見られよう。これはシュンペーターが『資本主義・社会主義・民主主義』（1942年）において、資本主義的経済発展がみずからにとって不整合な、敵対的な政治的、社会的、文化的環境をつくり出すことによって、革新の力を減衰させていくと論じたさいの論理である。

かくして、社会科学の諸領域を総体として眺めると、社会的とみなされる要因はすべて内生変数化され、議論の出発点となるべき与件および革新を確定することができず、すべてがすべてに依存するという流動的な状況に直面するのである。われわれは全社会科学的規模での一般的相互依存関係ないしは一般均衡とでも呼ぶべき状況に到達する。「すべての個別領域には相対的独立性があるにもかかわらず、任意の時点における任意の領域の任意の要素が任意の他の領域の任意の要素との間にある関係をもつという一大真理、すなわちあらゆる領域のあらゆる状態が相互に規定し合い、相互に従属するという一大真理が存在するのはなぜか。」⁽³¹⁾ シュンペーター

はこれらの領域の総体を1国の「社会的文化」(die soziale Kultur)と呼び、その全発展の総体を「社会的文化発展」(die soziale Kulturentwicklung)と呼んでいる。

社会的文化という統一体を観察するさいには、これまで個別の領域を区別していた相互間の壁は取り払われる。しかし、この拡大された領域について、再びこれまでに述べてきた観察方法の適用が示唆されるのである。そこには1国の社会的文化の静態と、それを揺り動かす社会的文化発展とが描かれるはずである。そこでは経済、政治、社会、文化、価値などの主要領域間の大きな相互作用が主題となるであろう。「このようにして、相対的独立性をもつ諸発展が共同作用する結果、十分な距離をもって眺めれば1つの統一的文化発展と見えるものが成立するのである。⁽³²⁾」

この大きな視野を描くことによって、これまで個別領域についてえられてきた認識が無効になるわけではない。それぞれの領域は依然として固有の秩序とメカニズムをもって作用するのであって、その秩序とメカニズムの発見こそが個別科学の目的であった。ただ、個別領域が設定していた与件の壁はいまや除かれ、隔離された個別領域の中で登場していた革新はいまや大きな世界の中で眺められなければならない。これによって、個別領域の諸要因は現実の生命を回復するのである。

もちろん、シュンペーターは経済学者であった。しかし、彼は、経済学によって設定された経済現象の世界は現実の一部にすぎないことを知っていた。しかも、現実の中から経済という領域を取り出してくるやり方は、科学的方法の便宜に依存しているにすぎない。したがって、彼は経済学の領域にとどまりながらも、他の社会現象の領域の理解に超人的な努力を払い、総体としての社会的文化発展の論理をつかもうとしたのである。次に述べるように、このことが、彼の考える経済分析の方法に著しく広い幅を与えることになった。

シュンペーターは、この総体としての社会的文化発展の論理を『経済発展の理論』の中で少しでも展開したわけではない。同書は経済という個別領域について、静態と動態の形式的分析を与えたにとどまり、以上のような広い視野のもとでの仕事は、単に研究計画として構想されたにすぎない。われわれはこれを「シュンペーターのプログラム」と呼ぶことができよう。ともかく彼はまだ 29 歳であった。社会生活の全般に及ぶ大きな発展像を描くためには、個別領域についての知識の蓄積が必要であった。彼の晩年における『資本主義・社会主義・民主主義』はこのプログラムの線に沿った最大の成果であった。

シュンペーターの主要著作を年代順に並べてみると、純粋経済学的なものから、次第に実証的、社会学的、歴史学的なものへと彼の関心が移行し、視野が拡大したような印象を与える。人は学問的成熟につれてそのような経過を辿るといわれることがある。しかし、シュンペーターの場合にはそうではなかった。彼は初めから広大な視野をもったプランを描いており、初めからそのプランの実現にたえず努めたのである。

4 経済分析の方法

(1) 4つの方法

経済学が科学として固有の問題領域をもつ場合、経済学の実質的な内容は、その領域に適用される方法ないし分析技術がどのようなものかによって示される。シュンペーターは経済分析の基本的な技術として次の4つを挙げている。⁽³³⁾(1) 経済史、(2) 統計、(3) 理論、(4) 経済社会学。これらの用具が全体として経済分析の工具箱に収められ、経済学は、これらの用具の改善を図りながら、適切な形で使うことによって経済を理解するのである。

これらのものは個々に見れば、大学の授業科目のようなもので、なんの

変哲もない。これらの方法がシュンペーターの経済学においてどのように組み合わせられているかを知ることが重要であって、そのためには、前節で明らかにされた問題領域との関連において、これらの方法がどのように適用されるかを明らかにしなければならない。シュンペーターにおける問題と方法との関連を論ずることによって、大まかではあるが初めて彼の学問の鳥瞰図を構成することができるのである。

まず、(1) 経済史と(2) 統計の2つは、経済学の対象となる素材が歴史性と数量性という2つの性格をもつことから要請される。「経済学の対象は、本質的に歴史的・時間における1つのユニークな過程である。なんびとといえども、歴史的・事実を十分に把握しておらず、歴史的・感覚あるいは歴史的・経験と呼びうるものを十分にもっていないならば、現在を含めていかなる時代の経済現象をも理解することは望めない」⁽³⁴⁾(傍点シュンペーター)。

他方において、「ある意味で、経済学はたんに『社会』科学あるいは『道徳』科学の中で最も数量的であるばかりでなく、物理学をも含めたあらゆる科学の中で最も数量的である。質量、速度、電流などは疑いもなく測定することができるが、そのためにはつねに特有の測定方法を発明しなければならない。……ところが、最も基本的な経済的事実の中には、それ自身ですでに数量的なものとしてわれわれに観察されるものがある」⁽³⁵⁾(傍点シュンペーター)。

いずれも疑いの余地のない事実である。したがって、現実の経済の理解に当って、経済史の叙述という形で現実が究明されるし、また経済量の系列である統計という形で現実が記録される。歴史の叙述はたとえ経済史に限ったとしても、すべて数量的に行われるわけではなく、非数量的、質的、定性的な形でも行われる。事実、伝統的な歴史叙述の方法をとる人々は、統計が存在しない過去を対象とすることもあって、制度的、社会史的側面を定性的に叙述することに傾いており、統計や数量にうさん臭さを感じて

いるように見える。もし歴史的方法がもっぱら特殊的、個別的なものの追求にあるという立場から見れば、統計や数量は数字の魔術によって質を捨象し、異質の個を簡単に同質的な量に集計してしまうために、信用できないからである。

このような問題をはらみながらも、歴史的研究は統計的研究と接続する。両者はともに現実の個別的な記述という点で協同することができるのである。

このような (1) 経済史および (2) 統計という 2 つの方法に比べて、(3) 理論は一見したところ著しく異なったものである。シュンペーターは経済理論における理論の意味として 2 つのものを挙げ、1 つは現実についての「説明的仮説」、いま 1 つは一般的「図式ないしモデル」と規定している⁽³⁶⁾。後者は仮説、公理、公準、仮定、原理、定理など、さまざまな言葉で呼ばれる命題から成り、それが前者と異なるのは、「それはそれ自身で興味があると想定される調査研究の最終結果を含むものではなく、興味ある結果を確立するためにつくられた単なる道具ないし用具にすぎない」(傍点シュンペーター) という点にある。

いいかえれば、後者の意味での理論は個別の事態を説明するだけのアドホックな仮説ではなく、あらゆる経済問題に関する一般的な思考の道具である。シュンペーターは後者を理論の妥当な意味であると考え、経済学においてこのような経済理論をほぼ完全な形で初めて確立したのはレオン・ワルラスであるとみなすのである。ワルラスの均衡分析こそが経済静態の問題を究明する一般的な理論であった。そしてシュンペーターは、『経済発展の理論』において展開したみずからの理論が、経済静態の領域を超えた経済動態の問題についての一般的な理論であることを主張したのである。

さて、このような静態と動態を含む理論にとって、経済現象が数量的で

あるという上述の性質は重要な意味をもっている。そのことは、経済理論が数学的に展開できるということの意味するからである。一般的な図式ないしモデルとしての理論はさまざまな種類の命題間の論理的関係によって形成されるといってよいが、数量的展開の可能性は明らかにこの図式を厳密なものにする。しかし、シュンペーターは経済理論の論理がすべて数学によらなければならないとは考えなかった。

「経済現象についてわれわれが知りたいと思うことの多くは、通常の思考方法に対する技術的、いわんや数学的洗練なしにも、また統計数字の精巧な取扱なしにも、発見し叙述することができる。数学的方法が排他的に優越しているという強烈的な信念や、歴史学者、民族学者、社会学者などの仕事に対する軽視ほど、われわれの気持から遠いものはない。」⁽³⁷⁾シュンペーターは1933年、創設された計量経済学会の初代会長として、『エコノメトリカ』創刊号に一文を寄せたとき、このように、およそ新しい学問の旗印に似つかわしくないようなことを述べたのである。

今日の経済学者ならば、経済分析の技術として、シュンペーターの挙げた経済史や経済社会学を落しても、数学を入れることを忘れることはないだろう。実際、シュンペーターの鷹揚な態度と違って、その後のエコノメトリックス（計量経済学）は理論・数学・統計の結合とみなされたのである。シュンペーターは理論を構成する論理の一部として数学を考えていたのであって、経済学における数学の重要性をたえず強調しながらも、あえてそれを別個のものとして挙げなかったことは、みずから数学的モデルを展開したことのなかった彼としては、節度を表わしているといえるかもしれない。いずれにせよ、経済静態が厳密な数学的定式化を受けるのに対して、彼自身の貢献である経済動態はそのような処理になじまないものであった。方法的にみて、理論における静態と動態とがこのような結びつき方をしていることは、注目に値する。このことは、彼が動態論の展開に失敗

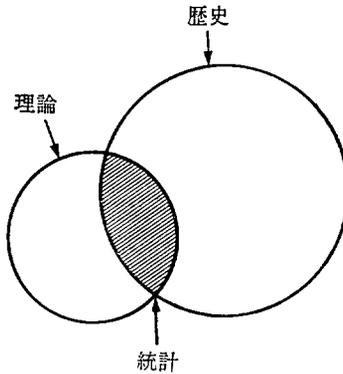
したということの意味するのではなく、彼の特徴的な動態論の理解の仕方
を表わしているのである。

この点について、スミーズは「彼〔シュンペーター〕は常に、数学が
ワルラス体系に対応する動態的体系を生み出すかもしれないという見込み
なき希望を抱き続けていた」と述べているが、シュンペーターがそこまで
考えていたかどうかは疑わしい。むしろ、次のようなハバラーの叙述の方が
事実に近いと思われる。「彼〔シュンペーター〕は……経済発展の大波
動の周辺にある小さな振動を説明するためにそれらの数学的モデルを限定
して用いることを望んでもいたが、しかし、それらが大きな経済の波動を
説明しえないのは、ちょうど一陣の風によって海の表面に起こされた波紋
が潮の干満という大きな現象にはなんの影響を与えないのと同様である、
(39)
と考えていた。」

ここで重要なことは、理論と歴史との関係である。理論における数学の
位置と、歴史における統計の位置とは、数学と統計とがそれぞれ経済学の
抽象的一般値と歴史的特殊値であるということによって対応する。理論が
数量的変数を含んでいる限り、統計を媒介として理論を歴史と接触させる
ことができるのである。上に述べたように、理論はあくまでも統計を超え
るものであり、歴史はあくまでも統計を超えるものであるけれども、統計
的数量化の領域は理論と歴史とが直接に重なり合う場面とみなすことが
できる。

いま大づかみな考えを伝えるために、次の図のように、理論的方法と歴
史的的方法とがそれぞれ対象とする2つの集合が重なり合っていると想定し
よう。斜線を引いた共通集合の部分が統計的数量化の領域と考えられる。
いっそう正確に言えば、理論と歴史とは同じ平面にあるのではなく、両者
の間にはレベルの差がある。このような両者を上から見て1つの平面に投
影したのがこの図であるといえるであろう。

シュンペーターの問題と方法



数量的統計を媒介とする理論と歴史との接触は、大別して2つの方向の研究を意味している。1つはなんらかの理論を歴史的現実にはらしてテストするというものであり、いま1つは歴史的現実から数量的パターンを事実発見 (fact-finding) を通じてつかみ、できればその理論化を図るというものである。もちろん両方向はフィードバックしうる性質のものである。また、このような理論と歴史との接触を、理論的研究の一部と考えるのが計量経済学であるし、歴史的研究の一部と考えるのが計量経済史であるといえよう。

経済静態を扱ったシュンペーターの『理論経済学の本質と主要内容』も、経済静態と動態とを扱った彼の『経済発展の理論』も、いずれも理論分析であって、現実分析を含まなかった。経済の静態と動態とを含む理論を現実に適用し、理論を補完し検証すると同時に、現実を理解し解明するという仕事は、彼の『景気循環論』(1939年)によって試みられた。その書物はまさに「資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析」と副題され、そのさい、理論と歴史とが接触する統計の領域において、主題としての景気循環の時系列が追求されたのである。彼の発展概念が歴史的現実の中で取

る姿は、景気循環にはかならなかったからである。

もちろん『景気循環論』における歴史的分析は、統計によって媒介された限りでの歴史研究ではない。またそれは理論を検証する限りでの歴史研究ではない。むしろそれ以上のものであるところに、歴史的分析の本質があるとみなされている。同書の「発展の循環的過程の問題への歴史的接近の基本的重要性」と題した節の中で、彼は理論・統計・歴史の関係を次のように述べている。

「われわれが理解しようと努めているものは、歴史的時間における経済変動であるから、究極的目標は理論化された（概念的に解明された）歴史にほかならず、しかもたんに恐慌や循環や波動のみについてのこのような歴史ではなく、あらゆる側面とあらゆる関連から見た経済過程のこのような歴史である、といって過言ではない。この仕事に対して、理論はたんに若干の用具と図式を、統計はたんに素材の一部を提供するにすぎない。詳細な歴史的知識のみが、個々の因果関係とメカニズムの問題の大部分に決定的な解答を与えることができ、この知識なしには、時系列の研究は不確定なままにとどまり、理論的分析は空虚なままにとどまらざるをえないことは明らかである」⁽⁴⁰⁾（傍点は引用者）。

のちに見るように、このような接近方法は明らかに歴史学派の本質的な精神に立脚したものである。また「血の気のない理論的図式と統計的曲線を生きた事実でみたま⁽⁴¹⁾す」という言い方も、歴史学派のそれである。しかし、1つの限定された時と所についての歴史的モノグラフを書くのと違って、資本主義の循環的發展という総体を分析しようとする場合、理論と統計は不可欠である。

先に、数理経済学のアプローチへの偏向のあまり歴史のアプローチを排除してはならないという、シュンペーターの言葉を引用したが、同時に、彼は逆の偏向にも警告を与えている。次の文章は歴史のアプローチを強調

する晩年の論文の中にある。「私は以下のコメントが当然といってよい誤解を受けないようにするために、ただちに次のことを明らかにしておきたい。私は景気循環現象への歴史的接近を提唱するに当たって、理論的あるいは統計的研究を犠牲にしたり、いわんやそれを排除してまで主張するつもりはない。この領域における私自身の試みが豊富に証明しているように、私は他の人々とまったく同じように、われわれの理論的装置の全体——集計的動学図式ばかりでなく、われわれの均衡分析を含む——を景気循環の研究に集中させることの必要性を確信しているからである。」⁽⁴²⁾

以上は経済学を構成するとみなされた4つの方法のうち、(1) 経済史、(2) 統計、(3) 理論の3つをシュンペーターの主題とのかかわりで論じたものである。最後に(4) 経済社会学が残されている。シュンペーターが設定した問題領域は、前節で明らかにしたように、経済静態および経済動態を超え、総体としての社会的文化発展に及ぶものであった。(1)(2)(3)の方法は本来の経済学に属しているが、その他に彼が(4) 経済社会学を挙げたのは、総体としての社会的文化発展の領域に接近するに当たって、本来の経済生活の領域にとって与件となるものを取り扱おうとするためである。

彼自身の経済社会学の定義を見てみよう。経済理論は経済生活の制度的枠組みを与件として成立しており、たとえば私有財産制、自由契約制、政府統制といったような要因は、直接に事実を記述する経済史によって論じられるが、同時に、「一種の一般化された、類型化された、様式化された経済史」⁽⁴³⁾によっても論じられる。このように歴史の中から抽象された制度の分析が経済社会学である。また、別の説明をすれば、経済学は人々がいかに行動するか、そしてその行動によって経済にどのような帰結が生ずるかを問う。それに対して、経済社会学は「人々がいかにしてそのような行動をとるに至ったかという問題を取り扱う。」⁽⁴⁴⁾人々の行為や動機や性向を規定するものとして、経済行動に関連のある社会制度をそれらの外側に想

定するならば、この経済社会学の定義は経済学の制度的与件を扱うという定義と符合する。

経済社会学の内容はかなり曖昧である。もちろん、それは前節で定義された社会的文化の全領域を一般的に扱うには狭いであろう。しかし、非経済的領域をばらばらに万遍なく取り扱うのではなく、経済という確固とした研究領域に焦点をおきながら、それに密接した制度的要因を通じて非経済的要因の作用を総括し、総体としての社会的文化発展をとらえることが現実的であろう。このような意図をもったものが、シュンペーターの経済社会学であると考えられる。彼がこの問題をこの方法によって解明したのが、『資本主義・社会主義・民主主義』であるといえよう。この書物はどちらかといえば学究的重厚さを欠いた叙述であって、経済社会学の方法についての基礎的展開はない。しかし、そこで取り扱われているものは、経済制度としての資本主義が全体としての社会的、文化的環境の中で辿る歴史的過程のプロセスにほかならないのである。また、彼の長大な論文「人種的に同質である環境内の社会諸階級」(1927年)も彼の経済社会学の代表的著作である。そして、彼が経済の世界において重視する企業者や革新を資本主義の制度的与件とみなすならば、彼の経済社会学がまさにこのような制度の分析に焦点をおいていることの理由が明らかとなるのである。

(2) 方法論争

シュンペーターのいう社会的文化発展の領域は総体としての社会にほかならない。このような広い視野のもとでは、理論と歴史とはもはや統計を媒介としてのみ接触するものではない。もちろんそういう接触も可能であるが、それは狭い経済理論の領域と広い全般的歴史(経済史にとどまらない)とを媒介する重みには耐ええない。いまや理論と歴史とを媒介する地位にあるものは制度というべきであろう。一方において、経済理論は、そ

れにとっての制度的与件を扱う経済社会学の媒介を経て初めて広大な歴史と結びつくことができるし、他方において、歴史は、それを一般化し理論化した経済社会学の媒介を経て初めて経済理論と関連をもつことができるのである。この広い社会科学的視野のもとで、シュンペーターが理論と歴史との関係をどのように考えていたかを追求しよう。これは彼が学問生活の初めから終りまで、一生を通じて抱いていた方法論上の主題であった。

容易に想像されるように、どういう用具を用いるかは目的に依存するのであって、たとえば、大木を切り倒す斧と髭を剃る剃刀とは、同じようにものを切る道具であるが、一般的にどちらが優れているかを論ずることなどは無意味である。また、ナイフとフォークは、一方はものを切り、他方はものを突くという別々の用具であるが、皿の上の肉を切るという目的のためには、両者の協同が必要である。この場合にも、どちらの用具が優れているかを論ずることは意味がない。

このような例は用具の分業と協業の姿を示している。このような分かり易い例については、論争が起こることはめったにない。しかし、経済学においては、しばしば方法論争が起こっている。とくに 1880 年代に始められたオーストリア学派のメンガーとドイツ歴史学派のシュモラーとの間の方法論争は有名である。シュンペーターはこの論争をまのあたりに見た。論争が収束するには 2,30 年を要したが、彼の評価によれば、この論争の歴史は「論理的基礎の明確化に若干の貢献をしたけれども、実質的には、もっとまじな目的に向けることのできたエネルギーの浪費の歴史であった。」⁽⁴⁵⁾「経済学は 1 つ」というのが彼の信念であった。理論派と歴史派との間の方法論争は、異なった方法についての誤解と狭量に基づくものであった。

先に述べた道具の例でいえば、理論派も歴史派も、大木を切り倒すのに剃刀をもってすべしとか、髭を剃るのに斧をもってすべしといった主張をすることによって、相手の道具を拒否するのではない。たとえていえば、

一方は、経済学の真の課題は大木を切り倒すことだと主張し、他方は、経済学の真の課題は髭を剃ることだと主張し、したがって一方は斧を、他方は剃刀を相対的にすぐれた道具だと主張したのである。真の争点は方法の違いではなく、むしろ問題の違いであった。すなわち、メンガーの言葉でいえば、歴史派は「現象の個別的本質と個別の関連」を見出すことを目的とし、理論派は「現象の一般的本質と一般的関連」を確立することを目的としたのである。⁽⁴⁶⁾ またたとえば、ハチソンは次のように述べている。「実際、方法論争は基本的に方法をめぐる論争ではなくて、何が最も重要かつ興味ある研究主題であるかをめぐる関心の衝突であって、一方は価格決定および配分の分析を主張し、他方は国民経済および産業の全体的発展と変化を主張した。」⁽⁴⁷⁾

このような論争は、経済学が2つの問題を統一的に把握することができれば解消する。排他的にとらえられていた問題をうまく組み合わせることができるなら、2つの方法は1つの問題を解くために協同せざるをえないからである。このような問題設定に成功するなら、皿の上の肉を切るさいのナイフとフォークのように、理論と歴史とは協同のための不可欠の用具となる。問題を離れて方法を論ずることの不毛さがここで明らかとなる。

シュンペーターは処女作の開巻劈頭、「すべてを理解することはすべてを恕することである」という格言を掲げた。これは方法論争に向けたものであって、いわば方法的寛容を説いたものである。すでに上述したように、彼は折角数学的方法を強調するために書いた論文においても、これは歴史的方法を排斥するものではないと書いたり、また折角歴史的方法を強調する論文においても、これは理論的方法を否定するものではないと書いている。このように、彼はつねに経済学における特定の方法を排他的に重視することを避けた。しかし、彼が理論と歴史の両方法の協同を論じた主要な文献は「グスタフ・V・シュモラーと今日の問題」(1926年)という長大な

論文であろう。そして彼はシュモラーのプログラムの中に経済社会学の原型を見出したのである。われわれは以下において、この論文や彼の学説史研究を取り上げ、歴史学派およびその指導者であるシュモラーについてのシュンペーターの解釈を手掛りにして、経済社会学の明確化に努めよう。

(3) 経済社会学とシュモラーのプログラム

シュンペーターは歴史学派の基本的な性格を次のように述べている。「歴史学派の方法論的信念の基礎的かつ独特の条項は、科学的経済学の体系は主として——最初のころは、もっぱら、と主張されたのだが——歴史的モノグラフの結果、およびそれから一般化から成り立つというものであった。」⁽⁴⁸⁾ またシュモラーについては、次のように述べられている。「事実を蒐集することが基礎的な課題となり、それを処理することがそれ以上のあらゆることをするための前提となる。これらの事実を秩序づけ、概括的に要約することが第2の課題である。」⁽⁴⁹⁾ これをシュンペーターは「シュモラーのプログラム」と呼んだ。シュモラーはこのようなプログラムを構想しただけでなく、みずから多数の細目研究を行うと同時に、それらの一般化を試みたのである。

シュモラーの『一般国民経済学概要』(1901-4年) 2巻は彼自身の歴史研究の総括であるとともに、歴史学派の一般化、体系化がどのようなものであるかをよく表わしている。試みに同書の目次を一瞥してみよう。⁽⁵⁰⁾

序論

1. 国民経済の概念
2. 国民経済および社会一般の心理的、倫理的、法律的基礎
3. 国民経済学における文献の歴史的発展と方法

第1部 土地、人口、技術

1. 経済とその外的自然環境との関係
2. 人種と民族
3. 人口、人口構成、人口移動
4. 技術進歩とその国民経済的意義

第2部 国民経済の社会的構成

1. 家族経済
2. 社会集団の生活様式（都市と地方）
3. 地域団体の経済（国家と地方自治体）
4. 社会的分業と経済的分業
5. 財産の本質とその分配の特徴
6. 社会階級の形成
7. 企業・経営形態の発展

第3部 財循環および所得分配の社会的過程

1. 交換，市場，商業
2. 経済的競争
3. 度量衡制度，貨幣制度
4. 価値と価格
5. 資産，資本，信用。賃料と利子
6. 信用組織とその発展。銀行
7. 労働関係，労働権，労働契約，労働賃金
8. 現代社会制度。救貧制度，保険制度，職業紹介，労働組合，仲裁裁判所
9. 所得とその分配。企業者利得，地代，財産所得，労働所得

第4部 国民経済の総体的発展

1. 国民経済の変動と恐慌
2. 階級闘争，階級支配，国家・法律・改革によるその衰退
3. 国家間の経済関係と闘争。貿易政策
4. 人類および個々の民族の経済的および一般的発展。興隆，繁栄，衰亡

これから明らかなように，歴史学派のプログラムは制度的要因を重視するが，その場合にもけっして一般化や抽象化を排するものではない。シュンペーターは，シュモラーが通常の経済理論を「大きな家の中の1つの部屋」として位置づけていることに注目している。シュンペーターが方法論争を無益なもののみなしたのは，どちらの側も事実上相手の側の接近を多かれ少なかれ利用し，その意義を認めているにもかかわらず，論争においては感情的に排他的な態度をとったからである。

方法論争においては，歴史と理論との相違が個別的と一般的，具体的と抽象的，個性記述的と法則定立的といった対立として強調されたが，シュンペーターはそのような対立関係を否定して，たんに現実的と理論的との

相違があるにすぎないとみなした。しかもその相違は程度の問題であって、いっそう重要なことは両者が二者択一ではなく、実際に協同関係にあり、またその協同関係を必要とするテーマが存在するということである。

シュンペーターが歴史と理論との協同を、メンガーの領域においてではなく、シュモラーの領域において論じたということは、当然ではあるが重要である。シュンペーターにはメンガー論がある。シュンペーターは、純粋理論の土壌をもたなかったドイツ語圏において、メンガーが独力をもって限界革命の先駆者となったことを高く評価し、またメンガーがこの敵対的な雰囲気の中で純粋理論を確立するために、歴史学派の支配に挑戦せざるをえなかった事情に深く同情した。そして、シュンペーターは「メンガーの仕事からは経済社会学や経済発展の社会学を引き出すことはできない⁽⁵¹⁾」とのみ述べ、理論経済学の側において歴史的方法への配慮が必要であるといったような野暮な議論は行わなかった。メンガーの価値・価格理論はそれ自身で自己完結的であったからである。しかし、もっと広い問題に関心を抱いていたシュンペーターは、シュモラーのプログラムの中に「普遍的社会科学への展望⁽⁵²⁾」を見出したのである。

シュンペーターはいま新しく経済学の研究を始めるとした場合、上述の(1) 経済史、(2) 統計、(3) 経済理論の中で1つしか選べないとしたなら、自分は経済史を選ぶと述べている。これは彼にしては珍しく非寛容的な言辭である。その理由として、彼は、第1に、経済学の対象は本質的に歴史的事象であること、第2に、歴史的事象の中には経済事象と非経済事象とが含まれており、経済理論によっては示されない両者の関連が示されていること、第3に、経済分析における誤謬は歴史的经验の欠如によることを挙げている⁽⁵³⁾。これらの理由は、「シュモラーのプログラム」の観点から導かれたものである。

さて、シュンペーターは「シュモラーのプログラム」が理論と歴史との

協同を保証するとみなした上で、両者の協同の姿を具体的な仕事の中に見出すことによって、このことを論証しようとする。彼の議論を、一方で、歴史の研究における理論の使用と、他方で、理論の研究における歴史の使用とに分けて整理しよう。

まず、歴史の研究の側から見ると、歴史の叙述は初めは個別的な出来事の記述であり、そのための資料学が技術的に生み出されたが、その場合にも、対象が真に唯一無二であったなら、人々の関心を惹かないはずである。そこにはなんらかの「普遍的な人間的関心」が働いており、それが物語を描写するさいの分析的梃子である。そのような関心を認識目的として明確化すれば、政治、経済、法律、宗教、科学などの個々の部門の側からの歴史研究となり、それらの分野の分析方法が歴史に適用されることになる。さらに、歴史研究が単に断片的な出来事ではなく、まとまりをもった状態や秩序やその変化を対象とするようになると、普遍的に適用される概念的図式によってさまざまな連関を明らかにすることが必要となってくる。その結果、歴史的資料を社会科学の個々の部門のフラスコに抽出する傾向が生まれる。

このようなものをシュンペーターは「歴史の科学化」とか「理論化された歴史」と呼ぶが、重要なことは、さまざまな科学部門が歴史を勝手に切り取るというところにあるのではなく、個々の専門分野の方法が歴史の場面において、あたかもはめ絵パズルのように、相互に整合化される段階をもたなければならないというところにある。シュンペーターが別のところで述べているように、「歴史的な記録は…異なった諸社会科学が相互にどのように関連すべきかを理解するための最善の方法を提供している」(傍点シュンペーター)⁽⁵⁴⁾ というのはこの意味でなければならない。こうして初めて、歴史研究の場面において既存の諸部門の区画が消え、「普遍的社会科学への展望」が開かれるのである。

このように見ると、このプロセスは、もはや理論が歴史に一方的に適用されるというのではなく、理論自身が歴史から影響を受けるという事態を表わしている。そこで、次に理論の研究における歴史の使用のケースを見よう。

いわゆる歴史的な理論というものは、シュンペーターによると次のようなさまざまなケースを含む。(1) 歴史的に例証された理論 (ロッシェー)、(2) 歴史的な事態に適用された理論 (スミスの重商主義論)、(3) 歴史的相対主義を内容とする理論 (リスト)、(4) 歴史的根拠によってなにかを説明する理論 (ヴィーザーの貨幣論)、(5) 制度の発生史を説明する理論 (シュモラーの企業形態論)、(6) 歴史的過程の比較をする理論 (マルクスやロードベルトゥスの分配論)、(7) 歴史を一般化する理論。シュンペーターは最後の (7) のケースをとくに重視している。それは歴史的資料に基づいて一般化を行い、しかも歴史を超えた普遍的妥当性をもつ理論である。このケースにおいてのみ、歴史的な個別研究が一般的な社会科学的認識につらなり、その他のケースでは、理論はまだ現実的であり、十分に一般的でないといみなされる。ここで「現実的」というのは、上述のように、歴史学派が「理論的」「抽象的」に対して「歴史的」「具体的」という場合の意味である。

実は、このケースに相当するものとして、経済社会学が位置づけられるのである。それは「対象の性質上、細目研究的、資料蒐集的であると同時に、理論的でもある学問⁽⁵⁵⁾」であって、その認識の対象となるものは純粹経済理論にとっての与件となるものである。「シュモラーのプログラム」はこのような経済社会学の建設を意味した。シュンペーターはこの分野におけるその後の代表者として、シュビートホフ、ゾムバルト、ウェーバーを挙げている。

経済社会学の本質的特徴は歴史と理論との相互作用にある。それは既存

の理論を歴史的経験に一方的に適用し、事態を説明するというのではなく、また歴史的資料の単なる要約にとどまるものでもない。「シュモラーのプログラムは、資料の単なる供給の中にそれ自体として含まれているよりもはるかに重要な意味において、新しい理論体系を生み出すのである。」⁽⁵⁶⁾

シュンペーターはこのような接近を必要とするものとして、景気循環研究を挙げている。このテーマはのちに彼がみずから取り組んだものであったから、それについての方法的叙述は注目に値しよう。景気循環の現象は、資本主義という特定の制度的様式のもとで起こるという意味で歴史的である。しかもそのさい、景気循環は資本主義にとまなう一現象というにとどまらず、資本主義的経済発展の本質的現象である。また景気循環は経済行為に関する公理体系から説明されるものではなく、現実的な細目研究によってのみ扱われるという意味で歴史的である。かくして、一言でいえば、景気循環は「細目研究によってのみ原理的理解が可能となるような、資本主義的機構の本質的契機である」⁽⁵⁷⁾（傍点シュンペーター）。

しかし、彼の『景気循環論』そのものは、たしかに大量の歴史的事実を取り入れてはいるが、分析の根幹はあくまでも統計量の変動であって、経済社会学を構成するには至らなかった。疑いもなく、『資本主義・社会主義・民主主義』はそのような体系的方法を展開したものである。

シュンペーターは歴史学派のシュモラーに深い理解と同情を示した。それはシュモラーの姿勢の中に、歴史の研究によって理論を展開し、理論の研究によって歴史を展開する方法的可能性を見出したからにほかならない。その方法が経済社会学であった。シュンペーターが通常の経済理論の問題領域を超えることができたのは、彼がシュモラーを通じて歴史学派の方法を批判的に継承したためであった。シュンペーターは初期の学説史研究の中で、歴史学派の観点として次の点を挙げた。⁽⁵⁸⁾ (1) 普遍妥当的な法則を否定して、歴史的相対性を強調する観点、(2) 社会生活における諸要素が不

可分に関連し、全体として統一性をもつという観点、(3) 人間行動の動機の全体を強調し、したがって反合理主義をも強調する観点、(4) 発展の観点、(5) 一般的本質の研究よりも具体的、個別的関連の研究を重視する観点、(6) 社会の個別的構成要素の機械論的見方を排した有機体的観点。これらの観点のうち、シュンペーターがほとんど無条件に継承したのは(2)と(4)である。(3)と(5)については、これらの観点が極度に押し進められないかぎり、考慮に入れられる。(1)と(6)は、普遍的一般化と原子論的見方を排する点において、放棄されねばならなかった。しかし、シュンペーターにとって最も重要な歴史的方法の意義は、すでに述べたように、発展現象を表わす歴史的素材は経済的および非経済的事実の相互関連を反映し、したがって異なった社会科学の領域の相互交渉のあり方を示唆するという事実であろう。これは歴史学派における(2)社会生活の統一性の観点と(4)発展の観点とを結合したものにはかならない。そして(2)と(4)を一語にまとめたものが「社会的文化発展」であるといえよう。

5 結語——経済と文明との緊張

シュンペーターの問題と方法の全体が一応明らかにされたこの段階において、彼の学問を特徴づけている問題意識のようなものを窺うことができるだろうか。それは問題意識と呼ぶほど彼にとって自覚的なものではなかったかもしれない。おそらく、われわれが彼の中に見出すことのできる精神状況といった方が適切かもしれない。われわれには、そのようなものが彼の多面的な業績の中に1つのモチーフのようにたえず繰り返し現われているように思われる。

シュンペーターは経済学を自然科学のような厳密な客観的科学の地位にまで高めたいと念願していた。このことから、彼の接近方法の特徴づける一群の要素が導き出される。分析装置ないし分析技術の重視、不連続を通

ずる科学的進歩への信念、対象の秩序化としての理論観、数学への羨望と憧憬、政治的党派性の拒絶、近視眼的政策論議の排斥、などがそれである。しかし、これらは彼の特徴の半分にすぎない。これだけならば、単なる数理経済学者の姿にすぎないのである。

シュンペーターは、経済学が与件の城壁によって取り囲まれ、その中でのみ一見自律的に生存しているにすぎないかぎり、社会科学として実用に耐ええないと信じていた。ここで実用というのは、経済学に基づいて経済社会の歴史的变化を予測することであり、また経済学を政策的実践に適用することである。彼はしばしば数理経済学者の試みを、玩具の鉄砲をかついで実戦の塹壕にのぞむたぐいであると述べたという。⁽⁵⁹⁾ いいかえれば、経済学の現状は虚学であるというのであろう。彼の接近方法を特徴づけるさらに別の一群の要素がこれと結びついている。経済を一部として含む総体としての社会的文化発展の視野、方法としての歴史学および経済社会学の強調、あらゆる知識分野の涉獵と貴族的銜学趣味、知的活動の論理を示すものとしての科学史への関心、実践への超越的態度、など。ここには、世俗的实践の世界に皮肉な眼を向け、みずからは歴史と文明の視野の中でのを考え、“Mundus regitur parva sapientia”（世界はなんと僅かな叡知によって支配されていることか）⁽⁶⁰⁾ とつぶやく哲人の姿がある。

しかし、このことは、シュンペーターの性格や感情までもが諦観的なものであったということの意味するのではない。むしろ逆に、彼は自分をきわ立って見せることを好み、強い自意識をもった野心家であった。「実際には、彼は外面的な成功や人気といったものを非常に気にするたちの人であった。」⁽⁶¹⁾ 「彼は自分の名を上げることに野心的であった。」⁽⁶²⁾

また、狭い経済学の領域を超えるに当って、彼は漠然とした哲学の領域に逃避したのでもなかった。彼は哲学的思弁を好まなかった。彼は確たる成果を求める現実主義者であった。「坐してわれわれの用語の哲学的、政

治的意味を冥想するのではなく、われわれの用具を取り、現実の問題と戦おうではないか。⁽⁶³⁾」

シュンペーターにおける2個の人間像はどのように結びついているのであろうか。人は年を取るにつれて理論から歴史へと関心を移すといわれる。しかし、シュンペーターにとって、この2つの知的追求の方向は若き日のプログラムとして書かれたものであった。人は理論から歴史へ関心を移すと、専門的、技術的研究に背を向けるといわれる。しかし、シュンペーターにおいてこの2つの知的関心は共存していた。

知の両極的な追求のプログラムはみたまされたのであろうか。共存した知の両極的な関心は満足すべき調和を意味したのであろうか。われわれは無批判に、シュンペーターが荘大な普遍的社会科学のプログラムを実現したとか、理論と歴史との総合を果たしたとか、経済学を超える社会学を完成したと語ることはできない。

彼は人並み以上の野心家であったけれども、彼を支えたものは著しい早熟性と超人的な努力とであった。いったい何が彼を無謀と思われるほどの広大な問題領域への探求に駆り立てたのだろうか。それにもかかわらず、彼が経済学を弊履のように棄てる月並みの異端者と違って、依然として真正の経済学者であり続けたのはなぜであろうか。

経済という領域はたしかに学問上の便宜に根ざして成立する虚構にすぎない。これをあたかも自己完結的な独立な実在と錯覚している経済学者ならいざ知らず、シュンペーターにとっては、経済を語ることはうしろめたさをともしないものであったに違いない。1人の学者としては学者仲間の約束と慣行に従って、抽象的な経済モデルがあたかも実在を対象とするかのように考えたり、あるいは経済モデルをアプリオリな仮定から導出された単なる仮説演繹体系とみなしたりすることで十分であったはずである。しかし、彼はそうした慣れに甘んずることなく、荘大な「事物の論理」に直

接肉薄しようと試みたのである。この試みは単に観察対象の範囲を拡大すればよいというものではなかった。経済学者にとって、経済学の範囲を超えることは適切な方法を失うことであった。彼は精通するための秘訣は制限することである、ということを理解していた。したがって経済を超えた歴史および社会の過程をとらえるためには、方法の思慮深い追求こそが不可欠であった。

「シュンペーターの精神の複雑性、多様性、⁽⁶⁴⁾普遍性」は彼の学問の問題と方法の中にすでに十分に表われている。シュンペーターにおける問題と方法との具体的な組合せは、彼の精神のユニークな性質を示すのである。われわれはシュンペーターにおける両極的な関心は「経済と文明との緊張」という問題把握に基づくものとしてとらえたいと思う。たしかに、経済は総体としての「社会的文化発展」ないし文明の一部にすぎない。しかし、経済は依然として経済であり、独自の秩序をもっている。資本主義の歴史的過程は「経済と文明との交渉」から成り立っているのであって、一方が虚構、他方が現実というものではない。この交渉の性質を対立ないし緊張関係としてとらえるところに、シュンペーターの独自の問題意識があった。彼が一方において、精密な自律的学問としての経済学の確立を志向しながらも、他方において、経済を取り巻く歴史的視野と社会的側面を論じようとしたのは、このような対象の統一的なとらえ方と結びついていた。むしろ、このような問題のとらえ方の中で、かえって経済学そのものの実学としての確立を図ることができたのである。「経済と文明との緊張」関係を包括的に展開したのは『資本主義・社会主義・民主主義』であったが、彼の個々の業績は究極的にこの全体像の構成に寄与するものであった。われわれが以上において明らかにしてきたように、彼の学問における問題と方法の設定は、「シュンペーターのプログラム」と呼ぶうる「普遍的社会科学への展望」を与えているが、このプログラムの全体は「経済と文明との

緊張」という内容的テーマに向けられていた。

- (1) J. A. Schumpeter, *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Dunker & Humblot, München und Leipzig, 1908, p. xv. (大野忠男・木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』上, 岩波書店, 昭和58年, 19-20ページ。)
- (2) P. A. Samuelson, "Schumpeter as a Teacher and Economic Theorist," *Review of Economics and Statistics*, May 1951, p. 102. (樫原三代平・佐藤隆三編集『サミュエルソン経済学体系』第9巻, 勁草書房, 昭和54年, 245ページ。) 都留重人『近代経済学の群像』日本経済新聞社, 昭和39年, 190ページ。
- (3) Samuelson, *op. cit.*, p. 100. (邦訳, 239ページ。)
- (4) Schumpeter, *History of Economic Analysis*, edited from manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, Oxford University Press, New York, 1954, pp. 3-47. (東畑精一訳『経済分析の歴史』1, 岩波書店, 昭和30年, 3-91ページ。)
- (5) *Ibid.*, p. 7. (邦訳 1, 12ページ。)
- (6) *Ibid.*, p. 8. (邦訳 1, 15ページ。)
- (7) *Ibid.*, p. 33. (邦訳 1, 62ページ。)
- (8) 塩野谷祐一「シュンペーターにおける科学とイデオロギー」『三田学会雑誌』昭和59年2月。
- (9) Schumpeter, "The Present State of Economics, or on Systems, Schools and Methods," 『国民経済雑誌』昭和6年5月, 8ページ。
- (10) *Ibid.*, p. 9.
- (11) *Ibid.*, p. 26.
- (12) Schumpeter, *History*, p. 7. (邦訳 1, 12ページ。)
- (13) T. S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, 2nd ed., University of Chicago Press, Chicago, 1970. (中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 昭和46年, 207-13ページ。)
- (14) Kuhn, *op. cit.*, Ch. 3. (邦訳, 26-38ページ。)
- (15) Schumpeter, *History*, p. 4. (邦訳 1, 6ページ。)
- (16) *Ibid.*, p. 10. (邦訳 1, 18ページ。)
- (17) *Ibid.*, p. 4. (邦訳 1, 6-7ページ。)
- (18) *Ibid.*, p. 6. (邦訳 1, 9-10ページ。)

- (19) *Ibid.*, p. 6. (邦訳 1, 10 ページ.)
- (20) Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1 Aufl., Duncker & Humblot, Leipzig, 1912. (第1版第7章のみの邦訳。佐瀬昌盛訳「国民経済の全体像」玉野井芳郎監修『シュムペーター・社会科学の過去と未来』ダイヤモンド社, 昭和47年.)
- (21) Schumpeter, *Entwicklung*, 2 Aufl., 1926. (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』上, 岩波書店, 昭和52年, 14 ページ.)
- (22) *Ibid.*, p. 1. (邦訳 上, 25 ページ.)
- (23) Schumpeter, *Entwicklung*, 1 Aufl., p. 537. (邦訳, 391 ページ.)
- (24) *Ibid.*, p. 537. (邦訳 391-2 ページ.)
- (25) Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, Harper & Brothers, New York, 1st ed, 1942, 3rd ed, 1950, Ch. 21 and 22. (中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』中, 東洋経済新報社, 昭和26年, 448-512 ページ.)
- (26) Schumpeter, *Entwicklung*, 1 Aufl., p. 538. (邦訳, 392 ページ.)
- (27) Schumpeter, *Entwicklung*, 2 Aufl., p. 3. (邦訳上, 28 ページ.)
- (28) *Ibid.*, p. 3. (邦訳上, 29 ページ.)
- (29) Schumpeter, *History*, p. 13. (邦訳 1, 24 ページ.)
- (30) Schumpeter, *Entwicklung*, 1 Aufl., p. 543. (邦訳, 397 ページ.)
- (31) *Ibid.*, p. 545. (邦訳, 400 ページ.)
- (32) *Ibid.*, p. 547. (邦訳, 402 ページ.)
- (33) Schumpeter, *History*, p. 12. (邦訳 1, 22-23 ページ.)
- (34) *Ibid.*, pp. 12-3. (邦訳 1, 24 ページ.)
- (35) Schumpeter, "The Common Sense of Econometrics," *Econometrica*, January 1933, p. 5.
- (36) Schumpeter, *History*, pp. 14-5. (邦訳 1, 28-9 ページ.)
- (37) Schumpeter, "The Common Sense of Econometrics," p. 5.
- (38) A. Smithies, "Memorial, Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950," S. E. Harris (ed.), *Schumpeter, Social Scientist*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1951, p. 15. (坂本二郎訳『社会学者シュムペーター』東洋経済新報社, 昭和30年, 48 ページ.)
- (39) G. Haberler, "Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950," S. E. Harris (ed.), *op. cit.*, pp. 40-1. (邦訳, 119 ページ.)
- (40) Schumpeter, *Business Cycles: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, McGraw-Hill Book Co., New York and London, Vol. I, p. 220. (吉田昇三監修『景気循環論』II, 有斐閣, 昭和

- 34年, 327 ページ.)
- (41) *Ibid.*, Vol. I, p. 222. (邦訳 Ⅱ, 330 ページ.)
- (42) Schumpeter, "The Historical Approach to the Analysis of Business Cycles," Universities-National Bureau Conference on Business Cycle Research, New York, November 25-27, 1949, p. 308.
- (43) Schumpeter, *History*, p. 20. (邦訳 1, 37 ページ.)
- (44) *Ibid.*, p. 21. (邦訳 1, 38 ページ.)
- (45) *Ibid.*, p. 814. (邦訳 5, 1710 ページ.)
- (46) C. Menger, *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der Politischen Oekonomie insbesondere*, Duncker & Humblot, Leipzig, 1883, p. 32. (福井孝治・吉田昇三訳『経済学の方法に関する研究』岩波書店, 昭和 14 年, 60 ページ.)
- (47) T. W. Hutchison, "Some Themes from *Investigations into Method*," J. R. Hicks and W. Weber (eds.), *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Clarendon Press, Oxford, 1973, pp. 34-5.
- (48) Schumpeter, *History*, p. 807. (邦訳 5, 1694 ページ.)
- (49) Schumpeter, "Gustav v. Schmoller und die Probleme von Heute," *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft*, Jg. 50, 1926, p. 354. (中村友太郎・島岡光一訳「歴史と理論——シュモラーと今日の諸問題」玉野井芳郎監修, 上掲書, 446 ページ.)
- (50) G. Schmoller, *Grundriß der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre*, 2 Bände, Duncker & Humblot, Leipzig, 1901-4.
- (51) Schumpeter, "Carl Menger," in *Ten Great Economists*, George Allen & Unwin, London, 1952, p. 86. (中山伊知郎・東畑精一監修『十大経済学者』日本評論新社, 昭和 27 年, 126 ページ.)
- (52) Schumpeter, "Gustav v. Schmoller," p. 176. (邦訳, 462 ページ.)
- (53) Schumpeter, *History*, pp. 12-3. (邦訳 1, 23-4 ページ.)
- (54) *Ibid.*, p. 13. (邦訳 1, 24 ページ.)
- (55) Schumpeter, "Gustav v. Schmoller," p. 369. (邦訳, 469 ページ.)
- (56) *Ibid.*, p. 375. (邦訳, 477 ページ.)
- (57) *Ibid.*, p. 376. (邦訳, 478 ページ.)
- (58) Schumpeter, *Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte*, (Grundriß der Sozialökonomik, I. Abteilung, Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft), J. C. B. Mohr, Tübingen, 1914, pp. 110-13. (中山伊知郎・東畑精一訳『経済学史——学説ならびに方法の諸段階』岩波書店, 昭和 55 年, 319-26 ページ.)

- (59) 都留重人, 上掲書, 207 ページ.
- (60) Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, p. 376. (邦訳下, 689 ページ.) この言葉は, グスターヴ二世を補佐し, 内政・外交に敏腕を振ったスウェーデンの名宰相 Axel Oxenstierna (1583-1654 年) が, 1648 年に彼の息子に書き送ったものといわれる.
- (61) Haberler, *op. cit.*, p. 47. (邦訳, 136 ページ.)
- (62) Samuelson, *op. cit.*, p. 99. (邦訳, 236 ページ.)
- (63) Schumpeter, "The Present State of Economics," p. 27.
- (64) Haberler, *op. cit.*, p. 45. (邦訳, 131 ページ.)